

○ 加賀の上杉景勝一行が泊する屋敷の一室

石川数正が泥酔の態。

信繁が御前に座している。

数正「わしの口を封じる為に徳川から刺客が放たれたとか……それで半月前からここに匿かくまわれておる次第だ！」

信繁「さよう御座いましたか」

数正「わしは殿と関白殿下の間を取り持つ役目を仰せ使っていた。

しかし殿は殿下と手を切り戦が始まった。わしの居場所はどうどこにもない！ そんな折、真田信伊のふただが話を持って来た。お前の親類だな！」

信繁「叔父おじです」

数正「わしはあいつに唆そそのかされたようなもんだ！ 聞けば真田安房あわの守かみの考えらしいではないか、お前の父だな！」

信繁「そうですが」

数正「ようするにわしは真田の手駒てこまに使われたのじゃ！ 酷ひどいではないか！ お前たちさえ唆そそのかさなければ考え直していたのだ。

徳川には長年の御恩があるんだから」

信繁「それはでも、唆されたのがいけないんじゃないんでしょうか？」

数正「身内の肩を持つのか！」

信繁「そういう訳ではありませんが、最後は自分で決めたことなので、自ら攻めを負おうしかないとありますが」

数正「そんなことは解っておる！（酒をグイと呷り）殿を裏切つてしまった……あれほどお世話になったというに」

信繁「もう、しようがないですよ、裏切ってしまったんですから……先が読めないのは皆同じです。だから必死に生きているんです。人を騙だましたり、裏切ることもあるでしょう……でも、それは善とか悪で測はかれるものではないと……わたしは思います……」

数正、信繁の言葉に呑まれてゆく。

信繁「石川様、取り敢あえず先に進みましょう！」

数正、信繁の心に打たれ、

「……うん！」

数正、信繁にかわらけを渡すと酒を注ぐ。